不登校についての体験談（保護者　２）

不登校の時期：小１の３学期～小６　　不登校の期間：　５年３か月

不登校になったきっかけを教えてください。

小学校１年の２学期から行き渋り、３学期から行けなくなりました。きっかけは特に分かりません。

学校に行かないときは、子供はどのように過ごしていましたか。

毎日テレビを見て、ゲームをしていました。

その時の気持ちや考えていたことを教えてください。

「いつになったら学校へ行くと言うのだろう」、「学校へ行かずに大人になれるのだろうか」と不安で、毎日苦しかった事を覚えています。

子供に対し、どのように関わったり、声掛けをしたりしていたかを教えてください。

休ませた当初は、学校に行かないのであれば、家できちんと過ごさせなければと嫌がる子供にいろいろやらせました。しかし、いやいややる事は、楽しくなくどれも実を結びませんでした。本を読んだり講演会などで話を聞いたりしては、子供に働きかけてみるが失敗するという事を何度も繰り返しながらの日々でした。

学校に行かなくなった当初から今に至るまで、子供や保護者の変化として感じたことを教えてください。

本当は、本人が一番辛いのですが、自分の子育てを否定された様に感じ、私自身が落ち込んで行き、この状態から逃げ出したいと思うほどでした。進んでいく先が見えて働きかけるのと違って、いつ動き出すのか、どんな結果が待っているか分からない状態でした。毎日テレビを見て、ゲームをしている子供を受け入れる事は、とても大変なことでした。

親の会に参加し、話を聞いてもらう中、私に出来ることで一番大事な事は、子供の理解者の一人になる事だと思えるまでには、数年かかりました。

「子供を楽にして、元気にしてあげることの大事さ」と「甘やかしたら駄目になってしまうのではないか」と言う思いの中で揺れていました。「子供が自ら学校に行くと言うまで待とう」と思えた頃、今まで何を誘ってもやってくれなかった子供が、自分から地域のミニバスに入りたいと言い、元気に活動するようになりました。

子供にしてよかったこと、やらなければよかったことを教えてください。

私は、子供が学校に行かずに大人になる事への不安でいっぱいで、嫌がる子供を無理やり学校に連れて行きました。そんな私に子供は「ロボットだったら良かったな。ドキドキしないで学校へ行けるもん」と言いました。それでも、行ってしまえば１日学校で過ごしてくるので、なんとか学校に行って欲しいと働きかけ続けた結果、子供はどんどん元気がなくなりました。私は、子供に「いない方がいいよね。」と言わせてしまうまで、自分のしていることの重大さに気付きませんでした。子供の将来を考え「子供のために」と思ってしていた事ですが、それは、「今のままでは駄目」を突き付けることになり、子供は小さいながらも心を痛めていたのでした。子供は、言葉にして私に伝えてくれましたが、もし子供が思春期だったら何も言わずに命を断ったかも知れない、そのくらい辛い事を強いていた事に気付かされました。

してよかったことは、ミニバスに入団させたことです。
何を進めてもやらなかった子供が、自分から「どうしてもやりたい」と言うので、バスケは出来ないだろうと思いながら申し込みました。
夢中でやれる自分の楽しみを見つけることの大切さを感じました。
バスケットは、子供にとって、自分を支え、元気を与えてくれる大切なものの１つに今でもなっている気がします。

不安を感じたとき、どのようなことをしていたか、教えてください。

自分を支えてくれたのは、「親の会」との出会いです。
「親の会」は、解決策を教えてくれる所ではありません。集まった人それぞれの不安や、悩み、体験を話すだけなのですが、「そうそう」「私も・・・」と自分の辛さ、不安を分かって受け止めてくれる人がいました。
辛さを分かってくれる人と話す事で、気持ちが楽になり、少しエネルギーをもらえるという体験を初めてし、共感することの大切さを実感しました。学校に行くか行かないかで一喜一憂するのでは無く、子供の苦しさを受け止め元気にしてあげる事が、次への一歩になるのかも知れないと思えました。

学校に行っていない人や行かない人に対してのメッセージをお願いします。

今振り返って思うことは、子供の人生は、子供のもので、自ら選択したときは、驚くほど逞しく歩いて行く。親ができることは、子供のやりたいことを応援し続ける事だけなのだということです。
子供は、それぞれ素敵な力を秘めているのではないでしょうか。